

貨幣博物館企画展「海を越えた中世のお金」関連研究会の様相

金融研究所貨幣博物館では2009年12月21日、企画展「海を越えた中世のお金—“びた1文”に秘められた歴史—」関連研究会を開催し、外部から中世貨幣史・経済史等に関わる多方面の専門家15名が参加。その概要を以下にとりまとめる。

(プログラム)

- ・報告1「割符の『流通』と信用構造」

大阪経済法科大学アジア研究所 伊藤啓介 客員研究員

報告1へのコメント

東京大学大学院総合文化研究科 桜井英治 准教授

- ・報告2「15世紀後半の東アジアにおける貨幣流通の変動」

鹿児島大学文学部 大田由紀夫 准教授

報告2へのコメント

北海道大学文学部 橋本雄 准教授

(報告概要)

- ・報告1「割符の『流通』と信用構造」

大阪経済法科大学アジア研究所 伊藤啓介 客員研究員

中世の手形の種類である「割符」については多くの研究が積み重ねられてきた。とりわけ桜井英治氏は信用貨幣としての割符に注目し、その定額性・流通性から割符の紙幣的性格を主張したが、批判も寄せられている。

彼等の批判をよむ限り、貨幣形態としての割符の性格や、「紙幣」の定義やその成立の経緯に考慮を払っている様子はなく、「割符の流通の様相が近代の紙幣とは違っている」ということを指摘しているにすぎないように思える。割符が、彼等も認めているように運送荷物の売却代金を受け止めるための手形だとするならば、それは債務証書にほかならない。そして債務証書が紙幣に転化していった例は歴史上数多く存在する。

だが保立道久氏による、中世手形類の信用貨幣としての機能についての提起を正しく受け止めるならば、割符によって銭貨を受け取る権利が譲渡されうるという点に注目し、貨幣代用物・信用貨幣としての割符の在り方からその本質を検討することが必要である。

本報告では、割符の「流通領域」と流通を支えた信用の構造について検討する。割符の流通の阻害要因である「違い割符」について新たな観点から検討すると、①「違い

割符」の中には、特定の事由によって支払人が割符の支払いを免責されるルールに基づくものがあつたこと、②そのルールを理解し共有する集団が階層として存在し、割符取引は彼等の存在を前提に、彼等の中で運用されていたことが明らかとなる。

割符の信用は支払人・振出人の決済の実績に基づく信用によって判断されるが、その際、支払人と受取人をつなぐ「直接の」取次人の総合的な返済能力に基づく信用によって担保されていたと考えられる。

割符は、振出人からみると第三者へと流通していくことがあつたが、その範囲は割符を取り次ぐ取次人との間に信用関係が存在する相手に限定されていた。割符の流通を支えたのは、「取次人に、(自己の利益のために)自らの信用を守ろうとする意思があることへの期待」にほかならない。割符は「その信用を守ることが自己の利益になる」という観念と、「他者もその観念を共有している」という期待をもつことが可能な階層に属する人びとの間で、さらに個別かつ直接的な信用関係によって繋がれた相手に対してのみ、信用貨幣として流通することが可能だった。割符の信用構造は、桜井氏をはじめ多くの論者に指摘されてきた「14世紀に商業従事者の間で成立していた倫理・観念」によって支えられていたといえるであろう。

割符の運用には、「商人」という言葉から連想される神人・供御人ほかの中世における遠隔地商業者や物流業者のみではなく、荘園の預所や年貢請負代官、名主層や在地領主、東寺の門指のような寺社の公人など、さまざまな層が関わっている。割符の「流通領域」は「商業領域」だけでなく「荘園制における年貢送進に関わり、そこから利益を得ている全ての層」といえるのではないか。割符と荘園制の関係は、中世の商業・流通経済と荘園制それ自体との深い関係を示唆する。

(桜井英治氏からのコメント)

「違い割符」の問題を手掛かりに、信用論にまで踏み込んだ野心的な報告であつた。裏切らないことが結局は得になるという囚人のジレンマ的説明に物足りなさを感じないではないが、これまで受けてきた批判の中ではもっとも生産的な批判である。

自分の論文では預かり文言の割符(約束手形、振出人＝支払人)も為替文言の割符(為替手形、振出人≠支払人)もともに流通型割符であり、畿内およびその周辺の振出の割符を考えていたが、伊藤報告では割符の文書様式の違いが流通形態の違いに対応しているとして、為替文言の割符は荘園現地振出の割符であり、畿内向けの商品輸送とセットになって振り出され、流通性はなく本支店のネットワークを想定・重視した解釈となっている。伊藤報告は新見荘の割符の流通過程について、研究史上最も多くを説明している。ただ、割符と商品の動きの連動性を説得性をもって説明できていない。

支払人が割符の支払いを免責されるルールの存在を推定しているが、近代的な解釈であり、問題の建て方に予断があるのではないか。債務取引上のルールを熟知していたというより、荘園領主的対応、もしくは中世に普遍的にみられた当事者主義的対応ではないか。

また安定的な「信用の鎖」を想定するのは、「鎖」の断線の発生などの事象も捉え、少し慎重になった方がよいのではないか。

さまざまな場所の割符が新見荘に到来し、持ち込んでいる商人も多彩だが、出先や

ネットワークというイメージで把握することができるかどうかはやや疑問。債権債務関係はどの時代にもあるが、それらが移転する時代と移転しない時代があり、割符の流通した時代は非常に移転しやすい時代で、割符に限らず 16 世紀初頭くらいまでみられる。

・報告 2 「15 世紀後半の東アジアにおける貨幣流通の変動」

鹿児島大学文学部 大田由紀夫 准教授

15 世紀後半の東アジア貨幣史に関する近年の議論は、中国の貨幣・経済動向と日本の渡来銭流通に焦点を当てたものが中心になっているが、当該期の通貨変動を十全に理解するには、日・中以外の地域も視野に入れる必要がある。15 世紀後半～16 世紀初頭の東アジアでは、興味深い2つの共時的現象がみられた。1つは東アジア各地における貨幣流通の変動(撰銭や悪布流通など)であり、これについてはこれまでもよく論じられてきた。もう1つは従来看過されてきた同時代の明・朝鮮・日本等における経済成長である。本報告は、この2つの共時的現象の背景・関連性について考察する。

まず 15 世紀後半の共時的経済成長についてみていくと、中国(明)では 15 世紀中葉の南北間物流体制の確立と、それに伴う銀財政化の進展が、北京における経済的活況をもたらし、北京市場の拡大を1つの原動力として、大運河沿いの諸都市での経済成長が進展していった。なお、この成長が当初より外部世界と密接な交流(南海密貿易の展開など)をもちつつ展開したことは留意されるべきであろう。

時を同じくして朝鮮でも、明との唐物取引、日本との倭物・南蛮物取引の活発化によって、ソウルの富裕層の生活がより奢侈的・消費的なものとなっていくとともに、ソウル市場が急速に拡大する。さらに中央と地方の交易拡大を通じて、朝鮮各地(特に南部)の商業活動を刺激し、小農たちの交易参入の機会を増加させることで、都市化・商業化を促していった。こうした対外交易の隆盛や商品流通の拡大と互いに刺激を与え合いながら、15 世紀における朝鮮の農業基盤の拡大も徐々に進展したと考えられる。明からの奢侈風潮の伝播、対明・対日交易の興隆、商取引の活発化にみられる共時性は、対外交易の展開と朝鮮経済の動向との間に密接な関連性があったことを示している。

「応仁・文明の乱」(1467～77)を画期とした日本における経済成長の始動も、当時の列島経済にとって東アジア域内の交易がもつ重要性を示唆するように思われる。15 世紀後半の朝鮮貿易や琉球交易の活発な展開による海外物産(いわゆる「唐物」)の流入増大は、日本の経済成長を促す重要な契機の一つであった。15 世紀末にピークを迎える日朝通交を通じて流入した綿布は広範な階層の人々を交換経済に巻き込み、またこの頃から盛んになる唐糸・青花の輸入も列島における産業の成長を刺激していった。15 世紀前半には商品流通が沈滞していた可能性があるのに対し、対外交易の活発化する同世紀末に経済成長も始動したことを踏まえるなら、日本経済に対する東アジア域内交易のインパクトは大きかったと評価できる。

以上のような 15 世紀後半の共時的経済成長と、渡来銭をはじめとする貨幣流通の変動との間には深いつながりがあった。1460 年代以降に明で激化する撰銭現象は、沿海部諸都市における商品市場の拡大(=流動性需要の増大)に起因していたと考えられ

るため、「低銭」＝「新しい貨幣」という先行研究の指摘(足立啓二氏)は正しいのではないかと現在では認識している。ただし、当時の銭貨流通の動揺は銭の国家的信用の喪失とはなんの関わりもない経済現象であった。

朝鮮では15世紀後半から悪布流通が顕在化するが、その背景にはソウルを中心とする商品市場の拡大に伴う流動性需要の高まりがあった。また、対明・対日交易の活発化と悪布流通の本格化した時期が一致することから、対外交易と貨幣流通の2つの動向は密接に関わっていたといえる。

日本の場合、博多遺跡からの出土例などを参照すれば、唐物流入の拡大期である15世紀後半には渡来銭の流入量も増加していた可能性が高い。博多を勢力下に置いていた大内氏が日本で最初に撰銭令を出したのは、やはり博多が対明・対朝鮮交易の窓口であったことによると思われる。日本における撰銭現象は、15世紀後半の明からの雑多な渡来銭の流入急増と、列島内での流動性需要の高まりという2つの出来事が重なることで発生した。ただし、この2つの出来事は、別個の要因によって引き起こされた無関係な事象ではなく、同一の要因(東アジア域内交易の活発化に伴う唐物流入の急増)から生じた一連の事象と見做すべきである。

こうしてみると、日本・中国の撰銭、朝鮮の悪布流通といった貨幣流通の変動は、1470年代前後から東アジア的規模で進展した国際交易の興隆や共時的経済成長に付随して起こったものとして理解できる。当時の東アジア経済を動かした原動力は、中国における「夷貨」への需要と、周辺地域における唐物需要の2つであり、この2つの力が相互に作用することで共時的経済成長が始動していった。さらに以上のような趨勢が進展することにより、つづく16世紀前半から中葉にかけて、さらなる経済変動が東アジアで引き起こされていくと考えられる。

(橋本雄氏からのコメント)

大田氏の報告の要点は、15世紀後半の唐物需要が東アジアの各地で拡大し、その対価としての通貨の需要が高まり、それへの対応として生じたのが、朝鮮では悪布であり、日本では低廉な銭貨であったという点であった。その際、密貿易ではなく、つなぎの役割を果たしている朝鮮と琉球が重要だというご報告だったと認識している。日本の対外関係史をやっている立場からすると、1540年代に入るまでは安易に日中間の密貿易を想定すべきではないと考えていたので、今回の報告が同様の見解で安心した。

大内氏の撰銭令が他に先んじて出された背景を対外交易史の観点から検証すると、1468年以降、1509年まで、大内氏は日明貿易から閉め出されており、そういった時期に撰銭令が出されていることの意味を考える必要がある。可能性の一つは、貿易の機会が失われて銭が入ってこなくなったということである。もう一つの可能性は、琉球との交易はこの時期にも存在したので、そこから銭が入ってきていたということも考えられる。

15世紀後半、偽物の琉球使者が多く朝鮮に渡っているが、1470年代～90年代に『朝鮮王朝実録』に表れる「琉球国王使」は、実は博多商人である。ただ彼らは、琉球とも実際に関わりを持っており、しばしば朝鮮人漂流民を琉球から朝鮮に送り届ける役目を負っていた。こうした点を勘案すると、福建で私鑄されている粗悪な銭が琉球から博

多というルートで、大内氏の領国に流入したと考えるのが一番自然ではないか。なお、大田氏が依拠した過去の琉球の東南アジア貿易の研究史については、史料を素朴に定量的に捉えている点で疑問がある。ひとつの貿易船が各港市国家を回航していた可能性も含め、全面的に再検討する必要があると感じている。

また、大田氏の報告では朝鮮にも注目されていたが、その際、日朝通交は 1460～80 年代は件数も多く、規模も大きい一方、1480～1500 年代は件数は多いが、規模は小さいという点に留意する必要があるだろう。

なお、大田氏の報告からは若干離れるが、日明貿易において銅銭がどのように使われていたかは、あまり突き詰められていない。「銅銭は貿易決済通貨であった」「銅銭は国際通貨であった」といった言い方をされることがあるが、いくつかの史料をもとに日明貿易にみる銅銭の役割を検討しても、15 世紀後半段階において銅銭が貿易の決済に使われていたと概括的にいえるかどうかは疑問である。遣明船で渡航時の「道すがらの買い物」に使われていたような事例をもって、「中国銭が貿易決済に用いられた」という言い方を安易にすべきではないのではないか。やはり、日明貿易にまつわる各局面の収支や交換の「現場」で、銅銭がどのように用いられたかを追究することが重要であろう。

(討論概要)

・伊藤報告に関しては、京都への年貢送金という毎年周期的に現れる債権関係を京都に関わる商人達が決済する場面で、割符が実際にどのように用いられたのかが議論となった。

具体的には、史料が比較的多く残っている割符流通の後半部分(畿内における割符の流通状況など)、およびそこから明らかとなる荘園領主と商人との関係から、史料がほとんど残っていない流通の前半部分(地方における年貢収納における割符の役割等)をどう推定するかといった点や、裏書きなしである程度流通した可能性などについて議論された。

・大田報告に関しては、『鹿苑日録』明応 8(1499)年 8 月 6 日条の「新銭」が何を示すのかを巡り、大内氏の撰銭令の条文や、日本側の撰銭状況の変化などを踏まえつつ議論がなされた。具体的には、「明銭」と捉えるか、福建などでつくられた「私鑄銭」「精銭」と捉えるか、といった論点が出された。

また、撰銭の発生メカニズムに関して、撰銭の契機をどのように捉えるのか、中国・日本・朝鮮とも貨幣需要の増加が貨幣の選別が始まった契機と考えてよいのかといった点についても意見が交わされた。

以上